

指揮のないエコシンフォニーアンサンブル

ENSEMBLE PASTORALE

アンサンブルパストラーレ

第4回公演『争いの先へ』

僕らは気がつかない。
愛を失うまでは。

2023.

5.26



19:00開演 日本福音ルーテル東京教会

L.v. ベートーヴェン (山本琢也 編曲):

ヴァイオリン・ソナタ 第9番「クロイツェル」第1楽章 (10重奏版)

Ludwig van Beethoven (arr.Takuya Yamamoto): Sonata for Violin and Piano No.9 "Kreutzer"

I . Adagio sostenuto - Presto (アダージョ・ソステヌート - プレスト)

D. ショスタコーヴィッチ: 弦楽四重奏曲 第8番 ハ短調 作品110

Dmitri Shostakovich: String Quartet No. 8

演奏: Olive Tree String Quartet

I . Largo (ラルゴ)

II . Allegro molto (アレグロ・モルト)

III . Allegretto (アレグレット)

IV . Largo (ラルゴ)

V . Largo (ラルゴ)

Intermission

L.v. ベートーヴェン (津上真音 編曲): **交響曲 第8番 (10重奏版)**

Ludwig van Beethoven (arr.Mao Tsugami): Symphony No. 8 in F major, Op. 93

I . Allegro vivace e con brio (アレグロ・ヴィヴァーチェ・エ・コン・ブリオ)

II . Allegretto scherzando (アレグレット・スケルツァンド)

III . Tempo di menuetto (テンポ・ディ・メヌエット)

IV . Allegro vivace (アレグロ・ヴィヴァーチェ)

L.V. ベートーヴェン (山本琢也 編曲):

ヴァイオリン・ソナタ 第9番「クロイツェル」第1楽章 (10重奏版)

Ludwig van Beethoven (arr.Takuya Yamamoto): Sonata for Violin and Piano No.9 "Kreutzer"

ロシアの文豪トルストイは1891年に出版された「クロイツェルソナタ」という作品の中で、ベートーヴェンのクロイツェルソナタを物語の重要な象徴として表現しています。作品のプロローグはマタイ伝の一節にあるイエスの言葉から始まります。「しかし、わたしはあなたに言う。だれでも、情欲をいだいて女を見るものは、心の中ですでに姦淫をしたのである。」トルストイはこの作品の中で、ベートーヴェン「クロイツェルソナタ」を性的衝動、情欲、といった人間の感情や動物的なエネルギーの象徴として表現しています。

物語は二昼夜に渡る列車旅をする「私」が、ロシアの結婚問題について乗客と論議していた際、ポズドヌイシェフという老人の話をきく場面から始まります。ポズドヌイシェフは、友人のヴァイオリニストが彼の家を訪れた事をきっかけに、妻に激しく嫉妬するようになります。彼の妻とヴァイオリニストは、とある演奏会でベートーヴェンの『クロイツェル・ソナタ』を合奏します。ポズドヌイシェフは、その演奏の素晴らしさに心打たれ、一時的に嫉妬から解放されるものの、彼の旅行中にヴァイオリニストが家を訪れてきたことを突き止めると、激しい憎しみに駆られて妻を短剣で刺し、殺してしまいます。ポズドヌイシェフは、刑務所に移送されたものの、名誉のための殺人であったとされ、無罪となります。「私」の前でこれだけのことを話すと、ポズドヌイシェフは臍り泣きながら毛布にくるまり、朝になると「私」はポズドヌイシェフに別れを告げます。

D. ショスタコーヴィッチ: 弦楽四重奏曲 第8番 短調 作品110

Dmitri Shostakovich: String Quartet No. 8

19歳で作曲した交響曲第1番は、ソビエト連邦国内だけでなくベルリンフィルに取り上げられた事を機に、西側諸国でも演奏されるなど、ショスタコーヴィッチは若くして国際的な名声を得ました。20歳の頃、ピアニストとしてもシヨパンコンクールにソビエト代表として派遣され、名誉賞を得ました。ショスタコーヴィッチのユニークな作曲表現の特徴の一つは標題音楽的手法を多用してメッセージを込めている事です。標題音楽とは音楽以外の想念や心象風景を聴き手に喚起させることを意図して、情景やイメージ等を描写した音楽の事です。彼がこの作曲スタイルを用いる理由の一つには、表向きに自由な表現をすることが許されず、長きにわたり政治的な抑圧を受けていた背景が考えられます。

1934年、26歳で発表したオペラ「ムツェンスク郡のマクベス夫人」は国際的にも成功を納めましたが、1936年1月26日にヨシフ・スターリンが『マクベス夫人』を観劇した際に内容に激怒し、2日後の1月28日の共産党中央委員会機関紙に作品の批判的な内容の無署名記事が掲載されました。作曲者の身に危険及びかねない状況となった中で、翌年作曲された交響曲第5番は、革命讃歌として共産党幹部たちに解釈され、自身の身の危機を逃れるきっかけとなりました。(第5番の4楽章は革命讃歌に聞こえますが、オペラ『カルメン』からのメロディーの引用があり、「(彼らに)用心せよ」というメッセージになっています。)スターリンの死後、1962年に作曲された交響曲第13番の第1楽章の標題である「バビ・ヤール」は、当時はソビエト連邦の共和国の一つであったウクライナのキーウ地方の地名で、ナチス・ドイツによるユダヤ人虐殺が行われた場所です。第1楽章はこの虐殺事件とともに、ソ連においてもユダヤ人に対する迫害や反ユダヤ主義が存在することを告発するような内容の歌詞になっています。また、第2楽章以降も、ソ

連の偽善性を揶揄しているとも取れるような歌詞が用いられており、初演の後、フルシチョフ共産党第一書記による命令で音楽や歌詞が書き換えられました。具体的には、ユダヤ人として生きる苦しみをキリストの受難に例える部分はロシア人やウクライナ人もユダヤ人と共に(ナチスによって虐殺され)この地に眠る、という内容に変わり、「ファシズム(ナチス・ドイツ)の侵攻を阻んだロシアの偉業」を讃える内容に変更されています。

今回演奏する弦楽四重奏第8番は15曲ある弦楽四重奏曲の中で最も重要な作品です。「ファシズムと戦争の犠牲者の想い出に捧げる」と題されていますが、有名な作曲者のイニシャルのフーガに始まり、自身の様々な曲からのモチーフが引用されているため、自身のための自伝的な要素が大きい作品と言えます。シヨスタコーヴィチの娘ガリーナ著の本『わが父シヨスタコーヴィチ』には重要な証言があります。「あれは1960年、ジューコフスカの別荘でのことでした。父が二階から降りてくると、椅子に腰をおろして言ったのです。『僕自身を記念する作品を、たった今書き上げたよ。』と。弦楽四重奏第8番は演奏されるとすぐにたいへんな評判を呼びました。するとたちまち、献辞を変更しろといういつもの圧力が始まり、父は譲歩せざるを得ませんでした。」

L.v. ベートーヴェン (津上眞音 編曲): 交響曲 第8番 (10重奏版)

Ludwig van Beethoven (arr.Mao Tsugami): Symphony No. 8 in F major, Op. 93

ベートーヴェンは交響曲第7番を作曲し終わった後、1812年の夏にポヘミアの温泉療養地にて第8番の作曲に集中していました。夏の間二回、ゲーテとの対面を果たしています。以前ゲーテが書いた悲劇エグモントに曲をつけたこともあり、ふたりは芸術談義に花を咲かせました。ゲーテはこの出会いの晩に妻宛に「あのよう集中的で、エネルギーで、しかも内省的な芸術家にはかつて会ったことがない」と書いています。

交響曲第8番初演時の聴衆の反応はあまり良くなく、ベートーヴェンは「聴衆がこの曲を理解できないのはこの曲があまりに優れているからだ」と語ったと言われています。また、同時期に発表され、熱狂的に人気となった第7番の影に隠れてしまった側面もあります。全交響曲の中で最も演奏時間が短く、編成も小さく、全て幸せな明るい曲調で、ベートーヴェン特有のドラマチックな展開もない事から、初聴で第8番を深く理解することは難しいのかもしれませんが。

当時41歳のベートーヴェンは芸術家としての名声をほしいままにし、仕事や恋愛にも充実した時期を過ごしていましたが、作曲者の恋は突如終わりを迎えます。ベートーヴェンの死後、机の引き出しの中から「不滅の恋人へ」と題され、誰にも渡されず、読まれる事のなかった手紙が見つかりました。

「私は貴方と完全に一緒に生きるか、あるいは完全に別れて生きるかしかできない。
辛抱強く…私を愛して…今日…明日と。私の愛する貴方…私のすべて…さようなら
ずっと愛し続けてほしい…貴方の恋人の忠実な心を決して疑わないで。
永遠に貴方のもの。 永遠に私のもの。 永遠に私たちの。」

この手紙が書かれた数ヶ月後に第8番は完成されました。そして交響曲第8番は全交響曲のうち唯一誰にも献呈されていない曲です。本人の言葉の通り、この曲がどれほど素晴らしいのかを一番理解しているのは作曲家本人であり、それはこの8番が彼にとって個人的で、大切な想いが込められているからなのかもしれません。



山本 琢也 ヴァイオリン *Takuya YAMAMOTO, violin*

桐朋学園大学音楽学部卒業。小林健次氏に師事。特別奨学金を受け米国リン音楽学校にてディプロマプログラムを卒業。エルマー・オリベira、キャロル・コール両氏に師事。ユージンシンフォニー第一バイオリン奏者を経て、アジア弦楽四重奏団第一のバイオリン奏者として、ボイジ州立大学修士弦楽四重奏プログラムのレジデンスカルテットを2年間、及びボイジフィルハーモニーにて第一バイオリン奏者、アシスタントコンサートマスターを務める。アスペン、メドマウント、グレートマウンテン、サイトウキネン、小澤征爾音楽塾、プロジェクトQ、等の音楽祭に参加。オーリーブツリー弦楽四重奏団第一バイオリン奏者。



奥野 玄宜 ヴァイオリン *Genki OKUNO, violin*

福岡県出身。桐朋学園大学音楽学部卒業。第47回南日本音楽コンクール1位及び優秀賞受賞、受賞者記念演奏会に出演。第57回全日本学生音楽コンクール3位。軽井沢八月祭、北九州国際音楽祭、防府音楽祭等に出演。国内最高峰室内楽メンバー演奏会、銀座王子ホールに出演等、全国で活躍。これまでに景山誠治、豊嶋泰嗣の各氏に師事。オーリーブツリー弦楽四重奏団の第二バイオリン奏者。



デイヴィッド・メイソン ヴィオラ *David MASON, viola*

米国ウィスコンシン出身。コンクールでの優勝を機に15歳でソロンチェルトデビュー。インターロックン音楽学校を卒業。全額奨学金を受け、ニューイングランド音楽学校にて学士号を取得。2015年イェール大学音楽修士課程を修了。スポレト音楽祭、パシフィック・ミュージック・フェスティバル札幌、アフィニス音楽祭に参加。ペトルツシ弦楽四重奏団のメンバーとして米国、中国でリサイタルツアーに参加。2017年ボストン大学博士課程在学中に兵庫芸術文化センター管弦楽団に入団。日本フィルハーモニー交響楽団の首席ヴィオリストを務めた後、現在、東京都交響楽団ヴィオラ奏者。オーリーブツリー弦楽四重奏団ヴィオラ奏者。



小島 幸法 チェロ *Yukinori KOBATAKE, cello*

NHK交響楽団チェロ奏者。東京藝術大学音楽学部卒業。同大学院音楽学部修士課程修了。これまでに金木博幸、間瀬利雄、苅田雅治、山崎伸子、藤森亮一の各氏に師事。マスタークラスをW.ヴェッチャー、P.ドゥマンジェ、D.ゲリンガスに師事。キジアーナ音楽院国際アカデミー、小澤国際室内楽アカデミー参加。JTが育てるアンサンブルシリーズ、JTアフィニスアンサンブルセレクション特別演奏、フジロックフェスティバル2018G&G Miller Orchestra等多数出演。ENSEMBLE FOVEメンバー。オーリーブツリー弦楽四重奏団チェロ奏者。



谷口 拓史 コントラバス *Hirofumi TANIGUCHI, contrabass*

北海道室蘭市出身。17歳よりコントラバスを学ぶ。洗足学園音楽大学を首席で卒業し、同大学院を修了。山本修、高山智仁、菅野明彦、藤澤光雄、ミハエル・ブラデラー各氏に師事。同大学卒業演奏会、第75回読売新人演奏会に出演。これまでに東京・春・音楽祭、小澤征爾音楽塾、おかやま国際音楽祭、別府アルゲリッチ音楽祭、北九州国際音楽祭、サイトウ・キネン・フェスティバルなど国内の主要演奏会に多数出演。I.ストラヴィンスキー作曲『兵士の物語』に於いては上演台本の翻訳、作成や総合演出を務めるなどジャンルを越えて精力的に活動している。2014年7月まで兵庫芸術文化センター（HPAC）管弦楽団Co-Principal奏者を務め、現在は関東を拠点に東京ジュニアオーケストラサテライト講師、岡山フィルハーモニック管弦楽団首席コントラバス奏者を務める。



満丸 彬人 フルト *Akito MITSUMARU, flute*

鹿児島県出身。鹿児島県立松陽高等学校音楽科を経て東京藝術大学を同声会賞を得て卒業、同大学院修士課程を修了。瀬木芸術財団より奨学金を得てフランスへ留学し、パリ地方音楽院、エコール・ノルマル音楽院で演奏家課程のディプロムを取得。また、クラマール音楽院でピッコロを専門的に学ぶ。第18回コンセル・マロニエ21木管楽器部門入選、第19回びわ湖国際フルートコンクール一般の部第2位、第1回刈谷国際音楽コンクール、グランプリ受賞、第16回ゲオルグ・ディマ国際コンクールフルート部門最高位(ルーマニア)、ジュンヌ・フルーティスト国際コンクールピッコロ部門第2位(フランス)、第18回日本フルートコンベンションピッコロ部門第1位。東京吹奏楽団フルート奏者を経て、現在名古屋フィルハーモニー交響楽団フルート奏者。



荒川 文吉 オーボエ *Bunkichi ARAKAWA, oboe*

1992年、東京都出身。東京藝術大学卒業。同大学院修士課程修了。修了時に大学院アカンサス音楽賞受賞。これまでにオーボエを池田昭子、広田智之、青山聖樹、小畑善昭の各氏に師事。第82回日本音楽コンクール 第2位ならびに岩谷賞(聴衆賞)受賞。第31回日本管打楽器コンクール第1位ならびに文部科学大臣賞、東京都知事賞受賞。Fernand Gillet-Hugo Fox Oboe Competition 2015第2位(日本人過去最高位)。The Muri Competition 2019(スイス)第1位及び聴衆賞受賞(日本人初入賞)。2017年秋より、アフィニス文化財団海外研修員としてベルリンへ留学。同年9月より2年間、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の「カラヤンアカデミー」に在籍。ジョナサン・ケリー氏に師事。2014年、大学4年在学中に東京フィルハーモニー交響楽団に入団。現在、同楽団首席オーボエ奏者。



アレッサンドロ・ベヴェラリ クラリネット *Alessandro BEVERARI, clarinet*

1988年ヴェローナ生まれ。9歳よりクラリネットを始める。2009年国立ヴェローナ音楽院を最高点で卒業後、ピアチェンツァ音楽院、ジュネーブの高等音楽学院、ローマ・サンタ・チェチリア音楽院にて研鑽を積む。2017年より、東京フィルハーモニー交響楽団首席クラリネット奏者に就任。第4回ジャック・ランスロ国際コンクール(横須賀)で優勝、聴衆賞、浜中賞を受賞した。2019年にはチャイコフスキー国際コンクール管楽器(木管楽器・金管楽器)部門3位、その他数々のコンクールに優勝している。パオロ・ベルトラミニ、ロマン・ギユイオ、アレッサンドロ・カルボナーレの各氏に師事。



加藤 智浩 ホルン *Tomohiro KATO, horn*

北海道出身。東海大学付属第四(現:札幌)高等学校、武蔵野音楽大学卒業。武蔵野音楽大学在学中、学内オーディション合格者による室内楽のタレに出演。第26回ヤマハ管楽器新人演奏会出演。2009~2011年、サイトウ・キネン・フェスティバル松本「青少年のためのオペラ」小澤征爾音楽塾オーケストラメンバーとして参加。第16回浜松国際管楽器アカデミー & フェスティバルにてジェフ・ネルセンに師事。講師推薦プレミアムコンサートにて第3位受賞。第8回浜松若きヴィルトオーゾコンサートに出演。これまでにホルンを島方晴康、故伊藤泰世、須山芳博、丸山勉、日高剛の各氏に、室内楽を白尾隆、吉岡アカリの両氏に師事。神奈川フィルハーモニー管弦楽団契約団員、シエナ・ウィンド・オーケストラを経て、現在東京交響楽団正団員。尚美ミュージックカレッジ専門学校非常勤講師。



西口 真央 ファゴット *Mao NISHIGUCHI, fagott*

弥栄高校芸術科音楽専攻を経て、東京藝術大学を卒業。卒業時に同声会賞受賞。桐朋オーケストラ・アカデミー修了。第8回横浜国際コンクール第1位受賞。第2回K木管コンクールにて大学生ファゴット部門1位及びグランプリ2位(1位なし)受賞。第2回ファゴットコンクール1位受賞。これまでにファゴットを井上俊次、岡崎耕治、岡本正之、神山純の各氏に、室内楽を井上俊次、河村幹子、小池郁江、濱崎由紀の各氏に師事。デビット・ザイデル、リッカルド・テルツォ、シュテファン・トゥルノフスキーの各氏のマスタークラスを受講。小澤塾音楽塾オペラ・プロジェクト2018参加。6月より仙台フィルハーモニー管弦楽団に首席ファゴット奏者として入団予定。